

第4回 西アジア分科会 議事録

開催日時: 2007年 3月 29日 15:30~17:00

場 所: 東京文化財研究所 第一会議室 (地階)

出席者(敬称略) : 前田、入澤、高橋、八尾師(分科会委員)、浅野、勝平(文化庁)、関、守山、細川(外務省)、片山(国際交流基金)、永井(文化財研究所)、青木、田代、豊島(コンソーシアム事務局)

■ インド-イタリア保存事業会議報告 [東京文化財研究所客員研究員 前田耕作]

報告の概要

- 2月14日に行われたインド-イタリア保存事業会議および翌日のインド各機関訪問について報告。当会議はインドとイタリアの合意に基づくプロジェクトの成果報告会議であるが、日本の文化庁とイタリア政府が文化財協力の合意を結んだことにより、イタリア政府から文化庁に対して出席要請があり、文化庁から出席の依頼があり、会議出席が実現した。
- 保存事業会議のうち、ローマ中央修復研究所+イタリア文化会館+デリー国立博物館が共催するセミナー及び展示会に参加。イタリア、インド各機関の専門家より、イタリア-インド保存事業に関する合意がなされて以降のタイムスケジュールに沿った事業の主たるあゆみがわかる内容の発表・展示が行われた。
- 日本は、「バーミヤーンにおける経験とシルクロードの壁画研究・・・日本はアジャンター石窟の保存に何が寄与できるか」というテーマで、隣接する中央アジア地域での壁画研究に関する実績と経験について報告を実施し、日伊印での3国の関係の中で新たに何かができるのではないかと、という問いかけを行ったほか、バーミヤーンの成果報告では高い評価を得た。
- 翌日15日は、アジャンター石窟の保全事業のインド側のキーパーソンであるインド考古局アウランガバード支局・考古化学監督官のシン氏およびインド考古局局長シャルマ氏を訪問。シン氏の勤務する国立博物館での保存修復室作業現場を見学。同博物館は今後保存修復に重点的にリソースを配分する方針とのこと。一方、シャルマ氏からは、アジャンター石窟の三次元スキャン調査に際しては、日本の企業からも問い合わせがあった旨情報を得た。
- この会議をフォローする形で、4月に文化庁がシン氏を日本に招聘する。これに伴い、東京文化財研究所では4月4日にシルクロード沿いの壁画の保存に関する共同ワークショップの開催を予定している。

- ・日本とイタリアは、お互いの国内の文化財だけでなく、第三国の文化財の保存修復活動に対して相互に協力しあうこと、また相互に第三国に対する人材養成を深めていくことについて合意し、3月19日に大臣間合意を結んだところである。イタリアは現在も150チーム以上を海外に派遣しており、地中海地域のみならず、今後はアジアでも活動を広げていこうとしている。その第1歩として、アジャンター石窟での保存修復活動を日本と協力して行いたい、との要望がある。
- ・4月4日のワークショップについては、配布の案内をご覧ください。この日のワークショップは、専門家だけのものではなく、一般にも参加してもらいたい。
- ・インドは南アジアの区分になるが、今後、この案件については西アジア分科会で取り上げていく。

■ 世界遺産パサルガダエ(イラン)とその周辺(ボラーギー谷)の考古学調査 [東文研 山内和也]

報告の概要

- イランの世界遺産であるパサルガダエ周辺の緊急考古学調査の成果報告。ダム建設により、水没の危機にあるパサルガダエ周辺の考古遺跡について、遺跡の現状を把握し、保護のための対策を検討するための筑波大学調査隊の緊急調査(科学技術研究費)に参加。
- ダム建設によって水没するのは世界遺産のコアゾーンではないが、そもそも早い時期に登録された世界遺産であるため、コアゾーンの設定が不十分であり、王の道や王の狩り場は水没してしまう。
- 現地では、遺跡として認識されていないようなものがまだまだ多くあり、今回の緊急調査でも様々な新しい遺跡の存在が明らかになった。
- パサルガダエ宮殿群の周辺では鉄道の開発や盗掘などが行われており、いまだ認知されていない貴重な遺産が破壊の危機にさらされている。

- ・今回の緊急調査はどのようなスキームで実現したのか?また、今回のように科学技術研究費を活用した緊急調査は、一般的に行われているものなのか?
 - 緊急調査は、自然災害だけでなくこのようなインフラ整備などの開発のケースでも必要となる。本来であれば、こうした開発による緊急調査等に対応できるスキームがあることが望ましいが、現状では存在しないので、今回の案件は、イラン文化遺産観光庁の依頼を筑波大学が受け、科学研究費によって実現した。内容からすると科学研究費には沿わないかもしれないが、必要に迫られてそのような形での調査を行う場合がある。その場合、どうしても費用が限られているので、大規模な調査は行えない。その他の科学技術研究費を用いた緊急調査の事例については調べてみなければ詳しいことはわからない。
- ・イランは、ここ 4、5 年で状況が変わってきており、外国人に対して発掘を許可するようになるなど、開放性が格段に高まっている。イランの文化遺産は、文化遺産観光庁が取り仕切っており、これは大統領府直属の有形・無形遺産両方を取り扱う大きな組織である。
- ・イランや中央アジアで行われているプロジェクトは他にどのような案件があるのか。
 - 中央アジアでは、小渕首相時代に始まったシルクロード協力が行われており、終盤にさしかかっている。イランのチョガー・ザンビール遺跡での活動は今年度で終了する予定。このプロジェクトには、埼玉大学の渡辺先生が UNESCO とのコンサルタント契約を結ぶことにより参加している。また、UNESCO 信託基金ではバム遺跡の保存修復活動に日本人専門家が個人としての資格で協力しているが、日本チームとしては参加していない。【国土館大岡田先生、埼玉大学渡辺先生等がコンサルトとして協力】
- ・イランに仏教が伝わった痕跡はみられるのか。
 - トルクメニスタン国境沿いなど、中央アジア寄りのあたりには、存在する可能性がある。しかし、あるとしても都市のはずれの目立たない位置にあたりするのではないか。このような目立たない位置の遺跡に関しては、現地の人々に尋ねると、驚くほど多くの情報を持っている場合がある。現に、今回の調査でも運河跡や王の道など、現地の人々や遊牧民からの情報が遺跡の発見につながった。仏教遺跡についても、現地の人々や、周辺地域をくまなく移動している遊牧民に尋ねれば、有益な情報が得られるのではないか。

・ゾロアスター教の遺跡はみられるのか。

→ ゾロアスター教は、神殿などがいないため、遺跡として発見できるものが限られている。ごくわずかに祭壇がある程度なので考古学の中でははっきりと位置づけられていない。しかし、これからの分野であり、今後調査対象として取り扱う余地はある。

・現在の厳しい国際情勢の中ではあるが、文化での国際協力は、イランであっても積極的に進めていけるものである。イタリアも、軍事的な問題と文化遺産国際協力は切り離して考えている。今後もイランでの文化遺産国際協力を推進していきたい。

■ 次回会議について

次回は、

日時： 6月1日(金) 15:30 ~ 17:00

場所： 東京国立博物館 平成館 3F 第2会議室 (開催場所が従来と異なります。ご注意ください)

以上